

【氏名】 溝渕久美子

【所属大学院】（助成決定時） 名古屋大学大学院人間情報学研究科

【研究題目】

1950年代の「文芸映画」と戦後ナショナリズム—文学全集ブームとの関連を中心に

【研究の目的】

本研究は日本における「文芸映画」という映画ジャンルを機軸に、1950年代の文学全集の発刊ブームとの関連性から、戦後の高度経済成長期の文化ナショナリズムについての考察を行うことを目的とする。修士論文や博士課程においての研究によって、戦前の日本における「文芸映画」の製作・流通・受容には、文壇における政治的な力学や出版などの要素が大きく影響していることが明らかにできた。そこで、本研究はこれまでの研究の成果を踏まえ、1950年代に再びブームとなる「文芸映画」を取り上げ、同時期に同じくブームとなった文学全集や文学史の編纂、そこからうかがえる戦後日本における文化ナショナリズムといなかる関係を持つかということ考察した。

【研究の内容・方法】

本研究の方法の中心となったのは、①1950年代の文芸誌や映画雑誌、新聞、その当時に出版された文学全集、文学史に関する著作の実証的調査と、②該当映画作品の分析である。

1. 1950年代の雑誌『キネマ旬報』の封切映画紹介記事、『映画年鑑』等からデータを収集し、どのような文学者の作品の映画化が「文芸映画」として扱われたかを分析した。

2. 1950年代の文学全集（1952年の『昭和文学全集』（角川書店）、『現代文豪名作全集』（河出書房）、1953年の『現代日本文学全集』（筑摩書房）、1954年の『日本文学全集』（新潮社）など）の①出版形態、②採録作家と作品、③全集の編者の編集に関する意識を実証的に調査、分析した。①、②、③については、新聞や雑誌などに掲載された広告記事や実物からデータを得、1950年代においてどのような意識のもとにいかなる作家の作品が日本文学の正典として権威を持ち、それがどれくらい広範な読者に共有されたかということ进行分析していった。また、1950年代に「文芸映画」と呼ばれた作品の原作と、全集の収録作品がどれくらい合致していたかを分析した。

3. 1950年代に出版された文学史（篠田太郎『近代日本文学史』1953年・学芸社、吉田精一『近代日本文学史』1957年・山田書院、日本文学研究会編『日本文学史』1955年・教学社等）について、国立国会図書館等に所蔵されている原本や購入する複製版から、①序文、②構成、③どのような作家がどのように取り上げられているかを調査した。

4. 1950年代における「文芸映画」の製作・流通・受容に関する調査を、早稲田大学演劇博物館、国立国会図書館等に所蔵される『キネマ旬報』『映画評論』『映画芸術』等の映画雑誌、『新潮』『群像』『婦人公論』等の総合文芸誌や新聞記事を中心に、「文芸映画」として扱われた映画作品の①製作、②流通、③受容に関する記事を収集し、行なった。また、この過程で、1950年代の「文芸映画」が学校教育（特に中学・高校での国語科教育・視聴覚教育）の中でも重要な位置づけであったことが明らかになったため、1950年代とそれ以前の国語科教育・視聴覚教育についての調査を行なった。さらに、「文芸映画」の国内外の映画祭への出品や海外への輸出も重要な要素であることも発見したため、それについても調査を行なった。また、補足的に購入予定の該当映画作品のビデオ・DVD等の分析も行った。

【結論・考察】

1950年代中期、特にポスト占領期である1953年から数多くの「文芸映画」が製作・公開された。「文芸映画」として映画化された作品の多くが、この時期の文学全集などに納められていることを考えると、映画産業が単純に出版にあわせて映画化したと考えられるかもしれない。しかし、文学史や文学全集の編纂にはきわめて政治的な理由があり、この時期の日本であれば、終戦から占領期、さらにはポスト占領期に失われつつあると考えられた日本の文化的な資本や「日本人」というナショナル・アイデンティティを確立することであった。したがって、そのような目的で「名作」とされた文学作品の映画化も、自然に非常に大きな政治的意味を担っており、「文学」という制度の権威をうしろだてにする以上、その「文学」という制度のイデオロギーとつながりを持たないわけにはいかなかった。また、戦前は「文芸映画」の観客として想定されてはいなかった女性や青少年を、「教養」や「教育」という文脈で取り込むことで、「日本人」全体に波及していった。さらには国外に「日本を代表する映画」もしくは「日本が誇るべき文学作品の映画化」として輸出され、大規模な映画祭で国際的な評価を受けることで、実際に国際的な政治的コミュニケーションの手段として利用されてきたのである。